

カンボジア見聞録# 2

カンボジア在住

柴田幹雄

プノンペンには雨期に入って少し涼しくなったが日中は 35 度 C くらい。雨期と言っても午後 2 時～4 時くらいの中にスコールのような土砂降りが短時間あるだけ。日本の梅雨のようにしとしと降り続くという雨ではない。こういう雨は何と呼ぶのか、スコールとか言うのかと聞くと、いやただの雨だ、とのこと。カンボジアの雨はこれが普通だから特別名前もないのだろう。

今回はカンボジアの結婚式と日本の支援で建設された橋について書いてみた。

カンボジアの結婚式に出席

わが家は以前から防衛大学校へのカンボジア留学生のホストファミリーをしている。防大は ASEAN 諸国、東チモール、モンゴル及び韓国から留学生を受け入れており、その総数は 120 名ほどになり、全学生に対する比率では日本の大学の中で最も高いそうである。偶然カンボジア留学生を担当するようになって 3 年、いま 4 名のカンボジア学生がわが家の「息子」になっている。彼らは私たちのことを「お父さん」「お母さん」と呼ぶ。最初に教わった日本語の一つらしい。これがまたなんとも面はゆくかつ嬉しいものである。

その中の一人 P 君のお姉さんの結婚式が近々あるという。カンボジアへ赴任する前から結婚式に出てほしいといわれていた。が、本当に出席していいのか、ご祝儀は渡すのか、いくら包めばいいのか、着ていく服は・・・と気になることも多い。聞いてみると「お母さんは着物で来てほしい。洋服だと中国人と思われるから。」という。お父さんは？と聞くと、答えは「お父さんは何でもいいです」だった。

結婚式前日プノンペンへ帰省した P 君が JMAS プノンペンオフィスに立ち寄り正式の招待状を渡してくれた。朝 6 時に結婚式場である自宅へ行くことになっている。当日は朝 4 時起床、家内の着物着付け、そのほか準備をして出発。部屋を出る前から汗が出る。会場へ着くと自宅の庭に大きな屋根型テントを張り入り口は花のアーチの飾り付けがある。カンボジアの裕福な家は庭も広く、結婚式は自宅で行う。P 君の家もかなり大きく、テントも張って文字通りのイベント会場だ。P 君に案内され式場に入り、そこに並べてある果物などが乗った器をもって外に集合した。そこから 100m ほど離れたいわば行進発起位置まで移動し、そこで列を組んでさっきまでいた式場に行くという。先頭は新郎とそのご両

親、そして私たち夫婦である。私たちの後ろにはやはり果物などを持った親戚、知人一同がずらりと並んで、そこから新婦の家へ赴く。これは新郎が果物、そのほかの食品をも掲げてこんなに裕福で食べ物もあるから、結婚しても大丈夫ですよという意味の行事だとのこと、日本の結納のようなものだろうか。新婦のご両親は、新郎とご両親を含む行列を家の前で迎え、挨拶を交わして式場へ導き入れた。



結婚した二人は新婦のご両親の家に同居するとのこと。その逆もありまた二人が独立して新たな家に住むこともある。比率としては男性が女性の実家に住む場合が多い。通常結婚式は女性の家または女性側が準備した場所で行う。結婚後も女性の名字は変わらない。子供ができると男性側の名字を名乗る。また独立して新居に住む場合も妻側の家の近くになるケースが多いとのこと。母系家族というほどではないにせよ、女性側に引っ張られている感はある。親にとって息子が遠くへ行くのはかまわないが娘は近くに住ませたいということらしい。



張られている感はある。親にとって息子が遠くへ行くのはかまわないが娘は近くに住ませたいということらしい。



早朝から始まった新郎側の行列が終わると隣の天幕へ三々五々移動して朝食。その後結婚式である。式は金色の刺繍の入った白い上着を着た二人の祭司の進行でおこなわれ、花で作ったレイの交換や、民族舞踊団の踊り披露など次々と伝統行事が続く。写真の「髪切り」は重要なパートである。

まずそれぞれの両親が後ろへ回り新郎新婦の髪を切る動作をし、その後鏡で本人たちに確認させる儀式で、悪霊払いの意味があるという。また女性は人生の大きな転機に髪を切る風習があり、最近まで式で実際に髪を切っていたという。

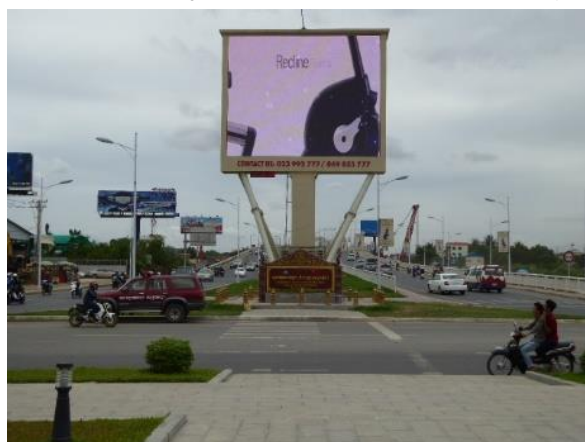
次の儀式は新郎新婦にご祝儀を渡し、手首に赤い吉祥糸を結びつける。このとき新郎新婦は床に並んで横座りし、膝の前にあるクッションに肘をついてお守り刀を二人で捧げ持つ。親戚知人が次々に二人の手首に吉祥糸を巻き付けたのち、その手に赤いご祝儀袋を持たせる。私たちはたまたまプノンペンで日本の少し豪華なご祝儀袋を見つけたのでそれにドルを入れて、そのご祝儀袋を持たせた。肘をついて刀をささげ持っている手に押し込むように持たせるのだが、やがて手のひらいっぱいになるとご祝儀袋は介添えが回収する。ただ私たちの日本製ご祝儀袋は珍しいためかずっと招待者側から見えるように最後まで残されていた。その後も檳榔樹の花をまいたり子孫繁栄や将来の幸せを願う儀式が次々に行われた。昼過ぎまで儀式が続いてお開きとなり、朝食を食べた天幕へ移動して昼食をとった。ここで参列者は解散して一度自宅へ帰り、家内は洋服に着替え二人で夕方6時からの披露宴にでかけた。

披露宴は市内の披露宴会場で行われるが、大きな体育館ほどのスペースで、10人掛けの円卓が約60卓ほどあった。披露宴は単純で、三々五々到着する出席者は順に円卓に座りその円卓が満席になると料理が運ばれてくる。新郎新婦は入り口でお客を迎え、途中から入場してくるがまだ席は半分くらいしか埋まっていない。新郎、新婦の席が正面にあるわけではなく正面のステージではバンド演奏に合わせて歌手が歌い続けている。挨拶もスピーチも何もなく、お客はただ運ばれてくる料理とお酒を楽しむ。席もほぼ埋まったころダンスが始まり私たちも引っ張り出された。新郎、新婦も踊っている。周りの人を見ながら踊っていたら真っ赤なドレスの少し色っぽいお姉さんと目が合った。彼女がにっこり笑って近くへ寄ってきて手の動きやステップなど教えてくれて一緒に踊った。帰りがけ、招待状に同封されていたご祝儀袋にお金を入れて募金箱のような容器に出して終わり。新郎新婦に見送られ会場を後にした。なかなか楽しい披露宴だった。

日本橋、中国橋

カンボジアは各国の支援でインフラ整備が進んでいる。日本も多額のODA支援により道路や橋などを建設したがその中の代表ともいえるのが「日本カンボジア友好橋」通称「日本橋」である。

プノンペンには東洋のパリと呼ばれることもあるが、トンレサップ川はさしずめセーヌ川ということろか。トンレサップ川はカンボジアのほぼ中央、プノンペンの北西100kmほどにある巨大湖トンレサップ湖から流れ、プノンペン市のすぐ東でメコン川と合流する。プノンペン市から北東に向かう国道6号線はまずトンレサップ川を渡る必要がある。1966年に日本の支援で架けられた橋は対岸の町の名前からクロイチョンワー橋と呼ばれていたが、1974年内戦で破壊されたままになっていた。1993年、日本のカンボジア復興支援第1号案件としてこの橋の修復が行われ開通した。この橋は片側1車線のもので、全長710m、市街地と対岸を結ぶ大動脈で「日本橋」と呼ばれている。しかしカンボジアの発展とともに交通量が増え渋滞するようになった。そこで乗り出したのが中国である。2010年にはカンボジアへの総支援額は日本を抜いてトップに立った。日本橋のすぐわきにできたこの橋は、日本人は「中国橋」と呼んでいる。これにより日本橋が下り2車線、中国橋が上り2車線計4車線の橋になった。あたかも日中の援助合戦を見ているようでもあるが、カンボジアにとっては結構なことだ。しかし気に入らないのは中国の架橋記念碑である。写真の右側が中国橋、左が日本橋だが、中国は2本の橋のたもとの中央広告塔のすぐ下に立派な碑を作った。碑には「カンボジア・中国の友情 新クロイチョンワー橋 20



14年12月」と記されている。碑はどう見ても中央にあるから2本とも中国が架けたように見える。おまけに中国橋の方が新しいから多少ゆとりもあり立派に見える。日本橋には橋のたもとの手すりにカンボジアと日本の国旗を描いた小さなプレートが付いているだけ。中国の億面のなさと日本の謙虚さがよくわかる。

JMAS オフィスのカンボジア人スタッフに聞いたら、現地の人たちは日本橋、中国橋を合わせてクロイチョンワー橋と呼ぶそうで、そうすると余計に中国が両方を建設したように思わせてしまう。しかしあまり援助合戦にこだわるのも品がないか。

古い1000リエル札には日本による橋建設のシーンが描かれていたという。ポルポト派の妨害にも耐えて橋の建設に奮闘した関係者の栄誉をたたえるものだ。残念ながらもうすっかり新紙幣になって、今は流通していない。

つばさ橋

プノンペンから国道1号線をメコン川沿いに南東へ60kmほど行くと、巨大なつり橋型のつばさ橋が見えてくる。つばさ橋までの国道1号線も日本の支援で出来た道路である。プノンペンからつばさ橋まで、広大なメコン川河川敷を通る部分は全経路3~4mのかさ上げをして道路を建設してある。両側は湿地帯も多く平坦で地平線が見える。かさ上げをした土砂はどこからか運んだのか、気の遠くなるような作業だったろう。

国道1号線は道路の番号からもわかるようにカンボジアの最重要道路である。この道路はタイのバンコク、プノンペンそしてベトナムのホーチミン市を結ぶ国際道路で、昨年末に発足したASEAN経済共同体の今後の発展にも大いに貢献する道路である。ASEAN10か国の人口は中国、インドには及ばないが、EUより多い6億2000万人である。カンボジアの状況を見れば、直ちにEU並みになるなどとは誰も思わないが将来発展の余地は大いにあるだろう。日本、中国がその影響力を保持、向上させようとしていることは大いに理解できる。

ところがその主要幹線の一つである1号線は最近までメコン川に橋がなく、渡河はフェリーを使っていた。渡河の待ち時間は数時間、時には7時間に及ぶこともあったという。1号線の利用者にとってこのフェリー利用は大きな障害だった。つばさ橋は主橋梁間640m、橋長2,215mで、取り付け道路まで含めると全長5,400mに及ぶ。この橋が開通したのは2015年4月でようやく1年余りがたったところ。この橋のお陰でいつでも川を渡ることができる。通行料はない。写真はスーパーカブがサイドカーを付け荷物満載、二人乗りで橋を渡っていくところ。



この橋のための供与額は約120億円。2004年の着工以来10年余の期間をかけ建設された。金額もさることながら、早い水流、雨期の増水など多くの困難に見舞われた。特に工事中に不発弾が発見されカンボジアの地雷処理の組織CMAC (Cambodia Mine Action Center: JMASのカウンターパート) が処理に関わった。そしてJMASもコンサルタントして処理に参加した経緯もあり我々にも縁のある橋である。この橋はネアックル

ン地区にあるのでネアックルン橋とも呼ばれるがカンボジア当局の決定で「つばさ橋」と命名された。高い橋脚の上から金色のワイヤーで支えられている姿が、あたかも鳥が翼を広げているように見えるため、日本語の「つばさ」からの命名である。橋を渡って大きく南にカーブし



た先につばさ橋建設の記念碑がある。日本にしては珍しく立派な記念碑であり、碑の基部は三角柱型で三面に日本語、英語そしてカンボジア語でつばさ橋と書いてある。技術的にもなかなか高度なものであり、片側 2 車線で多くの交通量をさばけるから隣に中国が第 2 ネアックルン橋をかける心配はないだろう。

国道 1 号線とこの橋はカンボジアのみならず ASEAN 諸国の発展に大いに貢献してくれると思う。

つづく